

2024年2月18日（日）／説教者：國分美生

説教：「これからの教会を考える」

聖書：創世記2：18～25

同性パートナーと子育てをしている知人女性からこういわれました。「キリスト教では同性愛は罪なんでしょう？それがあって教会にはいかなくなりました」。本来命を応援するはずの福音がこのように、誰かを追い詰めてしまうことを実際に目の当たりにして、教会はこの問題を深く考えていかねばならないと改めて思われています。

キリスト教では、伝統的に人が男と女、つまり雄と雌のカップルとして生活して子孫を生み育てることが、神によって創造された秩序正しい在り方であると言われてきました。一方でそれによって子どもを持たないカップルや、持たないことを選んだカップルが非難を受けたり、また「男と女」以外のカップルは神の創造の秩序に反するとされ、同性愛の人々が断罪されてもきました。

実は神が最初に人間を造られたとき、まだ性別はありませんでした。土のことをヘブル語で「アダマ」といいます。その「アダマ」でつくられたから「アダム」ですが、神はアダムのあばら骨からもう一人の人を、助け手・同伴者として造りました。どちらかが力を持っていて、もう片方がそれに従い、アシスタント的な役割をする、という関係ではなく、同伴者・連れ・仲間として、神は二人の人を造ったという点が大切なところです。人間が神に造られた対等な者として向かい合い、尊重し合い、助け合って生きることを神は望んでおられる、ということが天地創造の物語から浮かび上がってきます。

今、多様性、という言葉がよく聞かれるようになってきました。「多様性」という言葉を人間が造りだす前から人も世界も、神から多様なものとして造りだされています。男と女、という風に人間を分類して名付けたのも、人間自身であることを忘れてはならないでしょう。私たちのすぐ隣に、同性が恋愛対象の人、同性も異性も両方好きな人、持って生まれた性別がどうしても違和感を感じる人、などなどなど、いるのだと思います。そしてその一人一人が、神が愛をもって、互いに尊重し合い助け合うことを願って創造した一人一人なのです。

聖書は一部の人たちの都合に合わせて、誰かを断罪したり、それこそ人権を奪うために用いられてきた歴史があります。ですが、神の福音は徹底して人を生かすものであり、命を応援するものであること。つまり人権を守るものであることを私たちは忘れずにいたいものです。（國分美生）